

## 読書感想文優秀作品

第62回青少年読書感想文岡山県コンクール 高等学校の部  
最優秀賞 岡山県読書推進運動協議会会長賞  
(課題読書)

### 「当たり前」のこと

二年一組 吉田悠花

当たり前とは何だ。この本を読んでいると、常にそれを問いかけられている気がした。

生まれたときから今に至るまでに、様々なことが私に道徳を教えてくれた。両親に叱られたとき、友達と喧嘩をしたとき、ハンディキャップを背負った人に出会ったとき。私は思いやりの気持ちを学び、それは私の善悪を測る指標となった。その指標こそが、私にとっての道徳となっている。このように、私たちは幼い頃から道徳を持つことを教えられてきた。社会全体が道徳性を常識に掲げ、それについて深く考えることもなく、いつしか当たり前のこととなっていた。しかし、ナチス政権下のドイツならどうだろう。私たちの思う「当たり前」は、ホロコーストの時代においても「当たり前」と言えるのか。

結論から言うと、著者のレオン・レイソンが生まれた世界では、私たちの「当たり前」は崩壊するだろう。ナチスは、国内にくすぶっていた敗戦や不安定な経済情勢への不安を、ユダヤ人を迫害することで収めようと考えた。人間の心は弱いものだ。自分一人では抱えきれなくなった不安や怒りは、時に新たな憎

しみを吐け口とする。そうして人間の弱さは積み重なり、ホロコーストのような異常な社会風潮を形成した。そしてその風潮はその時代の「当たり前」となったのだ。私も例外ではない。やつ当たりをしたり、人を憎んだり、私の心にも確かに弱さは存在し、そのような異常な「当たり前」の形成に加担する可能性だつてある。

築かれた異常な「当たり前」は、当時のドイツに大きな変化をもたらした。それはまるで怪物のように、魔法の如く人の心に入り込み、侵食して、道徳を忘れさせてしまう。初めは僅かな差別から、やがて迫害は感化してゆき、罪のない人々が「ユダヤ人だから」という理由だけで殴られ、殺されるようになった。街に銃声が響くのも、ユダヤ人が毒ガス室へ送られるのも、信じ難いことだが、まるで当然のことのように行われていたのだ。作中でレオンは何度も迫害の理不尽さを訴えているが、怪物を前にしてそのような主張は無力だった。私は自分の心の中にある弱さを意識したとき、「私ならば、彼の話に耳を傾ける。」と断言できない。むしろ怪物に感化され、「当たり前」であるはずの道徳を見失ってしまうのではないか。そう考えたとき、私は自分の心の中に弱さだけでなく残酷さを垣間見た気がした。

オスカー・シンドラはそんな怪物に立ち向かった人物である。ナチ党員で資産家であった彼は、私財を投げ打ち、一二〇〇人のユダヤ人を救った。レイソンは命の恩人である彼を、「英雄とは、最悪の状況で最善を成すごく普通の人間である。」と表している。私はこの言葉の意味を、「怪物に侵食され、迫害や虐殺が日常となった世界でも、道徳を『当たり前』にできる人が英雄だ。」と解釈している。「当たり前」は時代によって変化してしまう。同じ人間を奴隷として扱った時代、民間人

に爆撃をしかけた時代、そしてホロコーストが行われた時代。それぞれ、それが異常な「当たり前」であった。私はそれらの歴史を振り返り、残虐である、非道であると感じるが、自分がそんな時代に生まれていたら、果たして同じことを思うだろうか。そして、これから先の未来にこのような時代が訪れたとき、私たちの「当たり前」を守っていけるだろうか。

道徳という「当たり前」のことを、いつの時代も貫くには、強さを持つことが必要だと思う。強さとは武力的な意味ではない。自らが困難に陥っていても、他人を思いやり、尊重できる度量を持つということだ。シンドラーはその強さを持っていた。異常な「当たり前」が形成された世界で、決して道徳を見失わなかった。自分が幸福なときに他人に親切にすることは誰にだってできる。肝心なのは、心に余裕がないときも思いやりを忘れない、優しさという強さを持つことなのだ。

移りゆく時代の中で「当たり前」は変化してゆく。その変化の中で、何を「当たり前」とするのかを決めるのは、結局自分自身なのではないか。テロリズムが各地で勃発し、世界経済も低迷しつつある今日、人種差別は今でも根強く残っている。宗教間の争いは絶えず、戦争がなくなることはない。いつか私の周りでも、「当たり前」が変化してゆくことがあるかもしれない。その時私は、やはり思いやりの心を持つことを当たり前にした。優しい強さを持って、相手を思う気持ちを忘れたくない。オスカー・シンドラーが行った「当たり前」の行為と、それに救われた少年の記録は、生涯私の中に生き続けるだろう。そして、私が「優しい強さを持ちたい。」と願ったとき、彼がそっと背中を押してくれるはずだ。人は誰だって英雄になれる。オスカー・シンドラーが普通の人間で、なおかつ英雄であったよ

うに。